

本物だから価値がある

逢坂興宏

今の時代は、インターネットに接続さえすれば、家に居ながらにして、行ったこともない見知らぬ土地を見ることができ、世界の博物館や美術館を訪れて標本や絵画を目にすることができる、そんな便利な時代になりました。現地に行かなくても、また目の前に実物がなくても、手に取るように（実際は触れないが）見ることができるということは、ある面で素晴らしいことですが、それで本当にいいのでしょうか。写真などの映像やレプリカが見られれば、本物を見なくてもいいのでしょうか。自然史博物館の標本と活用の仕方について考えてみたいと思います。

自然史博物館の使命と役割について高桑正敏氏は、「一般的には博物館資料を収集、保管、研究、展示をして、普及啓蒙活動をして科学の進展と教育に寄与する」（自然史しずおか 41、2013）ことと述べておられますが、私はそれに加えて博物館資料＝標本は本物であることが何よりも重要と考えています。本物であることの価値については誰も異存はないでしょう。私の専門の山崩れを例にすれば、実際に現地へ行って見ることにより、そのスケール感や地形の起伏、地盤の質感や色合いまでたくさんの情報が得られ、写真などの映像では得られない、まさに百聞は一見に如かずの価値があります。

標本の持つ価値について高橋真弓氏は、①分類学上の価値、②生物地理学上の価値、③生態学上の価値、④自然史上の価値（自然史しずおか 61、2018）の4つを挙げられていますが、これらの価値は標本が本物であるからこそ学術的な価値があるといえるでしょう。しかし、これまで多くの貴重な標本は個人が所有していたため、保管場所の確保や適切な管理に困難があり、散逸の危険性などがありました。そのためNPOは県内の貴重な標本資料を収集・整理し、保管することを県に訴え、自然学習資料の収集保存事業を行ってきたのです。

標本資料は何でも全て収集保管すればいいというわけでもありません。自然史博物館に

おける標本収集について柴正博氏は、「ある研究目的のために行われるものであり、博物館の活動を発展させていくために必要なもの」（自然史しずおか 39、2012）と、博物館における標本の収集目的と研究、教育と展示への活用について述べておられます。さらに、博物館は何のためにつくるのかについて、「自然学習・研究機能調査検討会報告」（柴正博、2000）では、①標本資料の適切な収集・保管のため、②子供たちを自然へと誘導していくため、③静岡県の持つ魅力をきちっと紹介するため、④環境教育や自然環境の保全のため、⑤社会教育施設としての役割とまとめられています。それらは標本の正しい活用の仕方を示したものと言えるでしょう。



ミドルヤード（講座室B）の様子

ふじのくに地球環境史ミュージアムには、他県の博物館にはないユニークな展示室（講座室と名付けられた）ミドルヤードがあります。専門家から直接説明が受けられる、公開研究室、オープンラボといったものでしょうか。清邦彦氏は、「今の学校の中では、虫や野鳥や化石や草花などの好きな子供たちが、そのことを教師や友達と話題にすることがなくなってきました。そんな子供たちが自分の好きなことを思いっきり話せる場所が必要なのです。」（自然史しずおか 54、2016）と述べておられますが、ミドルヤードがNPOの専門家と来館者が本物の標本を前にして対話する自然史博物館にふさわしい場になっていると思います。